

たくさんあるぞ！防災教育プログラム

- 環境防災科の取り組みから -

対象	中学生～高校生
コマ数	20～40コマ

実践校：兵庫県立舞子高等学校

<防災教育のポイント>

建築や土木、消防、自衛隊、行政といった分野の防災専門家が目的としているのは命を守ることです。高校や中学、あるいは小学校や幼稚園、保育園で行う防災教育の目的も命を守ることです。この「命を守る」という視点があれば、どんな教育も防災につながります。「防災＝避難訓練」といった図式からちょっと飛び出して、工夫次第ではどの教科も、どんな取り組みも防災になるといった視点で防災教育を考えて見ましょう。

災害は自然環境と社会環境の両方が重なったときに起こります。砂漠の真ん中での干ばつや太平洋の真っ只中の台風、人が住んでいない地域での地震などは単なる自然現象であって、災害ではありません。自然現象が発生している地域に社会があってはじめてそれが災害となります。その社会の防災力の強弱が災害の大きさを左右することは、近年のイランやアフガニスタン、アルジェリア、インドなどの地震で明らかです。災害を考えるとときにはこのように自然環境と社会環境の両方を考えなければなりません。ということは、この両方の分野で学ぶことはすべて、つまり学校で学ぶことはすべて、防災となんらかの関係を持っているといえます。

<防災教育模倣のすすめ>

兵庫県立舞子高等学校環境防災科は防災教育を行う学科です。総合的な学習の時間や選択科目の有効利用で防災教育を行うほかの学校と違い、専門科目で防災を学びます。3年間で履修する88単位のうち25単位が専門科目です。ですから、多様な活動を行えるのは当然で、それをそのまますべての学校で実践しろというのは少々無理がありません。それよりも、舞子高校で行っている防災学習の中で利用できそうな内容を選んで、それに自分の地域に固有の災害や風土といった要素を加味して修正すれば、日本のどこでも、どんな学校でも防災教育を行えるのではないのでしょうか。そのような意図をもって舞子高校の防災教育をまとめました。なお、地震や火山、気象といった理科や地学で学習できる内容は学習指導要領や教科書が完備されており、その気になればいつでも学習できるので省きました。ですからここにまとめたものは社会環境にかかわる学習活動です。

以下の学習はすべて高校生が対象ですが、同じ活動を小学生や中学生でも取り組むことができます。ここで挙げている活動事例はすべて素材です。料理方法は地域と学校の実情、学習者の年齢に合わせていろいろと変えてみてください。

体験者の講話

博物館での学習

コンセプトマップ

災害対応
シミュレーション

被害関連図

地域安全マップ

災害図上訓練

我が家の防災対策

架空のまちの
防災対策

壁新聞づくり

世界の
災害地図づくり

長田のまち歩き

まちづくり
10か条

六甲山
フィールドワーク

異年齢間の
防災学習

震災
メモリアル行事

総合的な学習の時間を使った
防災教育

◆体験者の講話◆ (2~3コマ)

目的： 実体験を聞くことで命の大切さや助け合いのすばらしさ、災害の恐ろしさ、復旧・復興過程での人間の英知を学ばせます。

方法： 震災を体験した市民に体験を語ってもらいます。

成果：

- 実体験に基づく話は重みがあり、あえて「命の大切さ」や「助け合いのすばらしさ」を強調しなくても、講師の話聞いて実感できます。
- 災害前の備えの不十分さ、災害の恐ろしさ・つらさなど、反省すべき内容を事例で話していただき、防災に取り組む大切さを学べます。
- 助け合いや復旧・復興過程での工夫などの話から、人間の持つすばらしい力を知ることができます。

◆博物館での学習◆ (半日~1日)

目的： 専門的な研究を行う施設を訪れ、災害の実態を学ばせます。専門家による特別授業を通して、防災に興味を持たせます。

方法： 災害の博物館を訪れ、見学、語り部による体験談、研究員による特別授業を行います。学習内容はレポートにまとめます。

人と防災未来センター

人と自然の博物館

野島断層保存館 など

成果：

- 防災への興味を高めます。
- 災害の恐ろしさを実感します。
- 自分の地域に固有の災害を知り、それに立ち向かう人間のすばらしさを学びます。

◆コンセプトマップ◆ (1コマ~)

目的： 災害が自然環境と社会環境の両方の要素が密接に絡み合って起こることを学ばせます。

方法： B4用紙の中央に「阪神・淡路大震災」と書きます。そのまわりに、「ライフライン」「火災」「建物倒壊」「ボランティア」など、自分が思いつくすべての項目を並べます。関連する項目同士を線で結び、課題、問題点、改善策などを書き足していきます。

成果：

- 災害に対して漠然と持っているイメージを整理することができます。
- ある一定の学習の前と後に2回行くと成果が良くわかります。1回目にはほとんど書けなかった生徒も、学習を終えて2回目には複雑に入り組んだマップを書き上げることができます。

◆災害対応シミュレーション◆ (1~2コマ)

目的： 災害時に自分がどう動くかを考えさせます。事前の備えに対する意識を高めます。

方法：

- 横軸に、地震発生直後、10分後、30分後、1時間後、2時間後、半日後、1日後、2日後、3日後、1週間後、2週間後というように時間を設定します。
- 縦軸には1日24時間をとります。
- 時系列に沿って、自分がどこにいてどんな行動をとっているかを書き込んでいきます。

成果：

- 縦軸に1日の生活サイクルを取り入れ、1日のかかりの時間を自宅で過ごしていることに気づかせることで、自宅での防災対策が大切であることを学びます。
- 緊急対応、復旧・復興の過程で、人の助け合いや英知を知ることができます。
- 一連の地震学習の前後で行うと、学習の成果が読み取れます。

◆被害関連図◆ 1～3コマ

目的：災害の大きさには自然現象だけではなく社会環境（社会の防災力）が大きくかかわっていることに気づかせます。

方法：

- B4用紙を縦に使い、上から4分の1くらいのところに紙幅いっぱい「阪神・淡路大震災」と書き込みます。
- その上は地震が発生する以前の社会環境、その下は地震発生以後の社会環境とします。
- 地震発生以前の欄には、その社会の実体をできるだけたくさん流れ図形式で書き上げます（例：建物の強度、交通網、人口密集度、消防や自衛隊、コミュニティ、備えなど）
- 地震発生以後の欄には、地震発生後の被害や緊急対応、復旧・復興の過程での課題をできるだけたくさん流れ図形式で書き込みます。

成果：

- 社会環境の複雑さと防災の難しさを学びます。
- 社会の中で自分が何をできるかを考えます。

◆安全マップ◆ 半日～1日

目的：自分の住む地域を知り、自分に何ができるかを考えさせます。

方法：

- グループに分かれて地域を回り、危険箇所や避難所、消火栓などをチェックします。
- 自慢できる場所（風光明媚なところ、安全なところ、公園など）もチェックします。自分の地域の地図に危険箇所しか記されていないとしたら、誰がそんなまちに住みたいと思うのでしょうか。いいところもあるということを見出すことも大切です。
- デジカメで写真を撮ります。
- 用意した地図にチェックした箇所を落とし込み、写真を張って、感想などを書いていきます。
- 舞子高校では地域の小学生といっしょに行いました。自治会や防災福祉コミュニティ（神戸市）の大人と一緒に回ることもできます。

成果：

- 地域を知ることができます。
- 地域の人と一緒に回ることでコミュニケーションがとれ、日ごろの地域の防災訓練に参加したり、学校行事に地域の人を招いたりでき、さらに災害時の避難所運営などもスムーズに行きます。

◆災害図上訓練◆

2～4コマ

目的：災害をシュミレーションし、いざというときに備えます。

方法：【A：地図を用いての図上訓練】

- グループに分かれて自分たちが作った地域安全マップを使います。繰り返し書き込みできるように厚めのビニールで地図を覆います。
- 全体をまとめる役割（教師）をおきます。
- 震度6強の地震が発生したという情報を与え、討議を開始します。
- 「〇〇時〇〇分、町内3箇所で大規模火災発生」「避難所に300人が避難」などの情報を教師が各グループに逐一与えていきます。
- 与えられた情報をもとに、対応策を検討していきます。
- 検討経過をメモに残しておき、最後に課題を話し合ってから発表します。

【B：役割を想定しての図上訓練】

- グループに分かれてそれぞれ役割を担います。行政 学校 自衛隊 警察 消防 NPO など
- 全体をまとめる役割（教師）をおきます。
- 「〇〇時〇〇分、町内3箇所で大規模火災発生」「避難所に300人が避難」などの情報を教師が各グループに逐一与えていきます。ただし、あるグループには伝えた情報を別のグループには伝えないなど、実際に即して運営します。
- あるグループから別のグループへの依頼や連絡（例：学校から教育委員会へ、避難者数の報告、困っていることの解決依頼など）もできます。検討経過をメモに残しておき、最後に課題を話し合ってから発表します。

成果：

- 地域での助け合いや、行政との連絡、情報収集など、市民として総合的に防災に取り組みます。
- 地域の弱点を考えることができます。
- 代理体験することで、実際の災害時での対応力を伸ばします。

◆我が家の防災対策◆ 4コマ

目的：防災は自助（自分の命は自分で守る）が一番大切であることを学ばせる。

耐震補強、家具の転倒防止などの備えが必要であることを学ばせる。

方法：

- 阪神・淡路大震災の死者の9割は建物倒壊による圧死であることを学びます。
- 「我が家の耐震診断」の冊子やHPを参考に、耐震診断方法を学びます。
- 自分の家の見取り図を描いて、耐震診断をします。
- 将来自分が建てたい家を考え、見取り図を描きます。
- その家の耐震診断をします。
- 不十分であれば設計図を描き直します。
- 家具の転倒防止や避難所の確認など、我が家で考えている防災についてまとめます。架空のものでもかまいません。

成果：

- 耐震補強と家具の転倒防止が命を守る第1歩であることを学びます。
- 家庭生活を防災の視点で見直すことができます。

◆架空のまちの防災対策◆ 5～10コマ

目的：地理や地学、防災の総合的な力の定着を図る。

方法：

- 自分で架空のまちを設定します。必要な要素は、地形、自然環境、人口、産業、インフラなど、あらゆる社会環境、自然環境に及びます。
- 自分で設定したまちの防災体制を考え、マニュアルにします。

成果：

- 架空のまちを設定するために、地理や地学などの知識を必要とすることから、これらの科目を総合的に関連付けることができます。
- 自分が作ったまちには愛着があります。愛着を持ってまちを守ろうとする市民の姿勢が身に付きます。
- 防災という課題を総合的に考えることができます。
- 防災を専門とする大学生ならかなり高度な内容のもので、小学生でも、自分の地域の地図に絵を描いて自分の考えを書き込むことができます。低年齢では意識付けに重きをおき、学習が進むほど専門的な内容にすれば良いでしょう。

◆壁新聞づくり◆

4～7コマ

目的：学習したことや自分で調べたことを壁新聞にすることでその内容を定着させます。

壁新聞を使って発表することで、学習の定着と発表能力の涵養につながります。

方法：

- 課題を設定します。例えば、阪神・淡路震災で学んだことを「被害状況」「消防」「ライフライン」「避難所」などの課題に分け、数人のグループで壁新聞にまとめます。
- 壁新聞を使って学習内容を発表します。
- 発表に対して、生徒同士の評価を行います。

成果：

- 学習内容の定着を図ることができます。
- 発表能力を高めることができます。
- 相互評価を行うことで、自分の学習で足らなかった箇所がわかり、再度課題を設定し調べなおすという学習のサイクルを実践できます。

◆世界の災害地図づくり◆ 4～5コマ

目的：世界には地震、火山をはじめ、洪水、台風、干ばつ、土砂災害など、さまざまな災害があることを学ばせませす。

方法：

- インターネットや書籍を利用して世界の災害について調べます。
- 調べた内容を世界地図に書き込みます。

成果：

- 日本に固有の災害である地震、火山、洪水以外にも多くの災害が世界にあることを学びます。
- 災害の多くが発展途上国、とくにアジアの国々で発生していることを知り、国際貢献のあり方を考えることができます。

◆ 長田のまち歩き◆

9~
11コマ

目的：実際に現場を踏むことで、本やインターネットでは感じ取れない地域の実情を実感させます。現場の体験を大切にする姿勢を育みます。地域住民との対話から、市民の発想を知ることができます

方法：

- 事前学習として、長田の歴史と震災の被害についてインターネットを使って調べ、レポートにまとめます。
- 4人程度のグループに分かれ、自分たちが訪れたい地域を決め、聞きたいことを考えます。
- 半日かけて地域を歩き、いろいろな人にインタビューします。
- 事前に調べたこと、当日のインタビュー、感想などをレポートにまとめます。

成果：

- 本やインターネット、報道では知ることのできない考え方に接することができます。
- まちの歴史、震災被害などを事前に学習することで、地域を見つめなおすことができます。
- インタビューを通して大人との接し方、人の考えを真剣に聞く姿勢が身につきます。

◆まちづくり10か条◆ 10コマ

目的：防災のまちづくりについて考えさせます。市民、行政、NGO・NPOなどの関係について考えさせます。

方法：

- まちづくりについての文章を読ませます（「阪神・淡路大震災 問わずにいられない」【神戸新聞社】、「防災はまちづくりの隠し味に 社会教育」【文部科学省】）。
- 市民、行政、NGO・NPO がまちづくりに果たしている役割を文章に沿って解説します。
- 自分が考えるまちづくり10か条を作成します。
- パワーポイントを使って考えた10か条を発表します。

- 文章講読と解説に3時間
- まちづくり10か条作りに4時間
- 発表に1時間（優秀なもののみ）

成果：

- 市民中心のまちづくり、市民中心の防災についての姿勢を育てることができます。
- 自分の考えを発表する姿勢が身につきます。

◆六甲山フィールドワーク◆

20~
40コマ

目的：阪神・淡路大震災、阪神大水害について社会環境と自然環境の両面から学んだ後、学習の集大成として六甲山を訪れ、断層、風化花崗岩、砂防ダム、水害記念碑などを見学して、知識と体験を結び付けます。

方法：

- 数10時間をかけて社会環境と自然環境の両方の視点から阪神・淡路大震災と阪神大水害を学びます（これは環境防災科でないと不可能でしょう）。
- 六甲山を訪れ、さまざまな地形や断層、砂防ダムの見学、風化花崗岩の採集などを行います。
- 見学内容をレポートにし、パワーポイントを使って発表します。

成果：

- 「災害と人間」「環境と科学」という科目を横断して行った学習を、体験を通じて一つにつなぐことができます。
- 現場を体験することで、学習した知識が生きてきます。



ネパールの子どもたちと防災をテーマに交流

◆異年齢間の防災学習（高校生が小学生を教える）◆

5～7コマ

目的：

- 高校生が子供のときに体験した阪神・淡路大震災を、今の小学生に語り継ぎます。
- 自分たちが学んだことを次の世代に伝えます。
- 小さな子供に教えることで、自分の理解を深め、わかりやすい表現に工夫を凝らします。



方法：

学年	2002年度	2003年度
小学校3年生	地域の安全マップづくり	地域の安全マップづくり
小学校4年生	震災体験、阪神・淡路大震災と備えの大切さ	震災体験、阪神・淡路大震災と備えの大切さ
小学校5年生	阪神大水害と土石流の発生メカニズム	
小学校6年生	震災体験、阪神・淡路大震災と備えの大切さ	地震と火山

- 小学校3年生「地域の安全マップづくり」 別記参照
- 小学校4年生、6年生への「震災体験、阪神・淡路大震災と備えの大切さ」の発表では「地震の概要」「震災体験」「消防」「ライフライン」などの課題別にグループ分けし、事前に壁新聞とパワーポイントを作ります。壁新聞作り、パワーポイント作りが学習内容の定着につながります。当日は小学生にわかるような言葉を選んで発表します。
- 小学校5年生の「阪神大水害」では、授業で作成した「阪神大水害新聞」を使って災害の様子を教える班、国土交通省六甲砂防工事事務所が作成したビデオを見せる班、ペットボトルを使った液状化実験を見せる班などに分かれて小学生に教えます。

成果：

- 高校生にとって自分たちが学習したことを定着させることができます。
- 小学生にとって身近な高校生から学ぶことで興味がわきます。
- 学んだ小学生が家庭で親に学んだことを話す効果が期待でき、防災を家庭から地域へとボトムアップしていくことができます。

ペットボトルを使った液状化実験 ①

ペットボトルの中にきれいに洗った砂を3分の1ほど入れ、プラスチックの頭のついた押しピンを数個入れます。水をいっぱい入れて、空気が入らないように注意してふたを閉めます。ペットボトルを一度さかさまにしてもう一度さかさまにすると（つまり、きちんと置くと）、砂の中にプラスチックの押しピンが埋もれます。ペットボトルを強く押すと、押しピンが砂の中から浮かび上がってきます。液状化でマンホールが浮かんでくるのと同じ現象です。

ペットボトルを使った液状化実験 ②

半分に切ったペットボトルの中に砂と小石を入れます。小石は砂の中に埋めます。ペットボトルに振動を与えると小石が浮かび上がってきます。

◆震災メモリアル行事「阪神・淡路大震災を忘れない」◆

15コマ

目的：

- 阪神・淡路大震災の体験を語り継いでいきます。
- 若者が防災に取り組んでいることを広く発信し、21世紀の防災の中心に若者、市民を位置付けます。

方法：

実施年	全 体 会	分科会	その他
2001年1月	心のケアの記念講演	25分科会	炊き出し
2002年1月	震災当時の知事による講演	23分科会	炊き出し
2003年1月	中学生による防災のとりくみ発表と専門家と生徒によるパネルディスカッション (防災で若者の果たす役割)	20分科会	炊き出し 小学生を対象とした展示とクイズラリー
2004年1月	外から見た震災と中から見た震災の発表 中学生、高校生、地域住民がパネリストとなり、地域からの防災を討論	10分科会	炊き出し 小学生を対象とした展示とクイズラリー

- 舞子高校1・2年生以外では、多聞東中学校1年生が全体会に参加、多聞東小学校6年生が展示とクイズラリーに参加します。地域住民や教育関係者、マスコミ関係者も自由に参加することができます。
- 行事の構成は教員が考え、講師の依頼なども教員が行います。
- 事前の展示物作り、当日の司会、クイズラリーでの説明と引率、記録などは生徒が担当します。
- 生徒がまとめた記録をもとに教員が記録集をつくり、冊子にします。

成果：

- 阪神・淡路大震災をはじめ、さまざまな災害を体験した講師の話から、命の大切さや助け合いのすばらしさを学びます。
- 体験者にとっては発表の場、生徒にとっては学びの場を提供することで、震災体験の継承・発信を進めます。
- 震災体験を風化させないために記録集を発行し、ホームページにも掲載します。この記録集が防災教育の教材となります。



◆総合的な学習の時間を使った防災教育◆

週1回実施

目的：

- 阪神・淡路大震災の体験を語り継いでいきます。
- 防災力をもった市民を育成します。
- 防災教育を通して教科の学習意義を再確認します。

方法：

- 実施クラス数+ α の教員が、自分の得意な防災の話を用意します。分野は大別すれば自然環境と社会環境、細かく分ければ「地震のメカニズム」「災害と文学」「国際貢献」「非常食」「ボランティア」などさまざまです。
- それらの教員が一人4時間を持ち時間として、各クラスをローテーションで回ります。
- 生徒から見れば、年間で5人～6人の先生が自分の得意な防災の話をしてくれることになります。
- 防災の骨格となる話については環境防災科の教員が全体を対象に講演します。

時間：

- 週に1時間を時間割の中に配当します。
- 一つのトピックについて4時間を持ち時間とします。
- 全体への講演は年に3回とします。

成果：

- 教員にとって、自分の得意分野から防災にアプローチすることになり、取り組みやすく、広がりを期待できます。
- 生徒にとってさまざまな分野の防災を聞くことができ、社会環境と防災、自然環境と防災について知識を深めることができます。

震災メモリアル行事に参加した 普通科生徒の作文

1年 女子

私はずっと垂水区に住んでいて、近所の被害もあまりないようでしたが、親せきの住む灘の方は被害が大きく、電車の中から見た焼け野原はもともとなにもなかったのかと思わせるほどでした。私は何度かその景色を見ただけだったのでよく考えませんでした。今日のお話はそういう所で起こったのかもしれないと思いました。震災後、その焼け野原にも次々に家が建ち、震災の被害を思わせない景色になりました。あれから9年経って、神戸は見事に復興し、震災を知らない子供も多くなりました。昨日やおとといから震災に関連したニュースをよく見るけれど、毎年少しずつ忘れられようとしている気がします。遠く離れた所から人が移り住み、神戸から出て行く人もいるなかで、1月17日のことを日本全体の人が考えて、みんなで忘れないようにしていってほしいと思いました。

1年 女子

今日の行事の中で最も印象に残ったのは、杉山先生の講演でした。スライドを使っている杉山先生のお話を聞いていると、何年も前の戦争時代にでもタイムスリップしたような気持ちにさせられました。まるで戦争の後のような写真の光景や杉山先生が読んでくださった警察官の文章。この神戸で9年前に起こった事だと思えませんでした。すごく沢山の被害者を出したということは、悲惨な心の被害も同時に多かったということです。私は杉山先生のおっしゃっていた言葉の一つ一つが心にしみ、お話に出てきた少女には、同情を抱いていました。震災で、こんな被害を一つでも多くだすことは本当に許されないと思う。そのためにも、環境防災科があるという恵まれた環境の舞子高校で私たちが出来ないことはないと思います。これからは、自分達に出来ることからやっていければいいと思いました。

1年 女子

特に今日の行事の中で印象に残ったのは、名古屋や静岡の人たちの当時の気持ちを知ることができたことです。あの時、神戸ではたくさんの命が失われましたが、やはり他人事のように感じていたんだなあということに少しショックを受けました。誰でも最初は他人事のように考えるだろうと思います。「自分の住んでいる所は安全で良かった」などと考えると、そういう思いを危機感に変えて「もしこの場所で同じような地震が起きたら・・・」という風に自分に置き換えて考えることが重要なんだと思います。

1年 男子

僕はあの日、神戸市内でも特に被害の激しかった灘区で被災した。灘区は隣の東灘区に次いで二番目に死者が多い地域。自分の家も全壊で、周りの家は崩れている所、火災で焼けてしまった所などもあり、家の近くの駅は駅舎が倒壊し、路線も脱線、高速道路でさえも倒壊していた。こんな壊滅した街で、僕ら家族の唯一の“頼み綱”は人の温かさだった。ライフラインも停止し、交通も頼りにならないこの街では人の温かさが一番大事だったのだ。灘区内の会社が救援物資を送ってくれたり、水を配りに遠い所から来てくれた人、避難所で食べ物を分けてくれた人、避難所の小学校で、勉強を教えてくれた人など、様々な協力を頂いた。それから、しばらくして、街を歩くと“街”が“街”で無くなっていった。あちこちに置かれた人の死体、崩れたビル、泣き叫ぶ人、何台もの救急車・・・幼いながらに、背筋が凍りついたのを覚えている。そしてまたしばらくして、僕達は今の場所へ引っ越した。あの日から九年、灘の街は様変わりし、空地があちこちに残っている。人々の生活も、すっかり元に戻りつつあり、新住民も増え、更に“震災”が風化しつつある。僕は正直、最近まで震災の事はあまり誰にも言わなかった。というか語りたくなかった。でも今は違う。あの日を後世に伝える事。それが“防災意識”への理解の一歩であること、そして、被災者である僕達が後世に震災の恐怖を伝える事、防災の大切さを語り継ぐ事が震災犠牲者の方の死をムダにしない事だと気付いた。だから僕は語り継ぐ。一人の被災者として。

1年 女子

世界中の各地で起こっている震災や火災では、誰かが亡くなり、誰かが傷つき悲しんでいると思います。少しでも犠牲者の数を減らすために、学校で訓練することを大切にしたいと思います。第三部で言っていた、地域の人たちとの交流を大切に仲間を作りたいと思います。仲間を作っていくことで今まで知らなかったことも知れるし、自分が持っている情報をつたえていけたらいいなあと思います。私は、今まで地域の人たちと交流があまりなかったので交流の機会があれば、積極的に参加したいと思います。いのちを大切にすることを言われていたので、今まで以上に大切にしたいと思います。

1年 男子

多くの人が亡くなり、家が倒壊し、火事になった。大変な大惨事にもかかわらず、自分が、自分の家が無事だったので、その震災自体を軽く見てしまっていた。そのことに気付かされた。小さな子ども、親が多く死んだと思う。それを軽くみる、見てしまっていたということが、とてもおろかなことであると思う。震災のことを伝える大切さを学んだ。

でも、覚えていることは、ただこわかったこと、お腹がすいたこと、大変だったこと。

それぐらいしか頭がない。でも、覚えているそのことをどうやって切り抜けてきたのか。それはひとえに、周りの人々との協力であり、助け合いであったと思う。広島から、おじいちゃんたちもきてくれた。大切なのは助け合いだった。そう思われたとき、伝えるべきはそこである、とそう思った。もし、今、この時に、地震がおこったらどうするか、何をするのかを考えたいと思った。周りで困っている人がいても何もしてあげられないとなると、これほど情けない話はないと思った。

何ができるかは、その場にならないとわからない。でも、何も考えずに、そのときが来るより、くる前にできるだけ考えられる限りのことを考えたいと思う。

それでも、震災のことを知らない人がいたら教えてあげたいと、そのように思う。

2年 女子

一番印象に残っているのは環境防災の皆の話。こんな身近にこんな重い体験をしている人がいたんだと思った。家から避難したり、身内、親せきの方が亡くなったり、家の中がぐちゃぐちゃだったり。私は自分が揺れを感じるだけの体験だったので人事程度にしか地震を考えていなかった。でも、話を聞いて自分が体験しているわけじゃないのになんか

分科会。学生の立場からというのを考えて聞いていた。人それぞれ一人一人の立場が違う分、聞いていて皆が自分とは別な体験をしていて、それぞれ震災に対して考え方があったらと思った。体験した人が一番伝えることができる、その伝える場を作るべきではないか、また間接的に聞いて何か感じることもできたなら、その人が伝えていけばいいんじゃないか。そんな話にまた少し気持ちが動いた。

2年 女子

ボランティアはとても大変なことです。それを進んでやる人はえらいと思います。その人のボランティアのはじめの印象は、偽善者とかそういう印象だったそうです。でも、なにかのきっかけからボランティアのすばらしさに気づいたそうです。それから、いろんなボランティア活動を行ったそうです。ホームレスの人の越冬の手伝いをしたり、沖縄のライ病患者に会いに行ったりしたそうです。阪神大震災の時も1年ぐらいボランティア活動をしていたそうです。でも、その裏ではいろいろ悩んだりしていたそうです。私は、そうやってやりたいことを見つけて熱中できることがうらやましいと思いました。その人が最後に言ったメッセージは、自分のやれる時には自分のやれる範囲でやること、でもできないことはできないことではかたがたないが、一生懸命なんでもする。ということでした。いつかわたしもやれることを一生懸命やりたいと思いました。